

## 巻頭言

## コロナ禍のもとで再認識

生源寺 眞一（全国大学生生活協同組合連合会会長理事）

新型コロナ禍でキャンパスライフが激変してから2年が経過しました。キャンパスライフが消えたと表現されることもありました。とくに都市部の大学では、入講制限のもとで静まり返ったキャンパスが長引くケースもありました。依然として過去形で語ることはできません。まもなく新たに1年生を迎える時期なのですが、オミクロン株の感染拡大で行動の抑制を求められている地域も少なくありません。大学生協の経営をめぐる厳しい状況も続いています。象徴的なのが食堂です。学生不在の状況下で休業を余儀なくされたことで、職員の配置の見直しを迫られたケースも少なくないのです。むろん、学生の皆さんにとっても困ったことです。不規則で偏りのある食生活が続き、心身に不調をきたすことも少なくないからです。

コロナ禍はキャンパスライフに深刻な影響をもたらしていますが、他方で協同組合や大学生協の存在意義を再認識するきっかけという面もあります。そのひとつが助け合いの大切さの確認であり、大学生協連の「たすけあい奨学金」を支える動きが加速していることをお伝えしたいと思います。これは扶養者を失った学生さんを支援する仕組みですが、寄付者や賛助会員によるサポートが広がりつつあります。大学生協の経営が厳しい状況下で、大学生協以外の団体などによるサポートも増えているのです。この背景にはコロナ禍で厳しい状況下に置かれた仲間が存在するなかで、人々に助け合いの大切さへの思いが深まっていることがあります。救貧活動や関東大震災の

支援でも知られる賀川豊彦の理念と行動が思い起こされます。

大学生協の存在意義という点では、会員生協・地域ブロック・全国連の各段階で学生委員を中心に若者力が存分に発揮されていることも強調したいと思います。ひとつの例ですが、昨年7月に実施された学生アンケートが注目を集めました。回答者の自由記述欄のリアルな声が公表されたこともあって、全国紙や地方紙に取り上げられました。さらにアンケートを受けて、オンラインの全国大学生サミットが開催されましたが、朝日新聞社などが後援し、百を超える企業・団体からの協賛もいただきました。大学生協の社会への情報発信力を支えているのは、学生委員を核とする若者力だと申し上げても過言ではありません。

大学生協は若者の成長の場でもありたいと考えています。長期の視点に立つとき、コロナ世代となる現在の学生の皆さんに大いに期待しているとも申し上げたいのです。コロナ世代との表現には、かつてのバブル世代との対比が念頭にあります。80年代後半に卒業したのがバブル世代で、就職などに苦労がなかったと言われてきました。これに対してコロナ世代は、先が見通せない状況下で互いに励まし合い、助け合いながら困難を乗り越えることになるでしょう。そんな強さを大学生協の若者から感じ取ることができるのです。コロナ世代には、地球上に共通体験の仲間が多く存在するという特色があります。これも広い視野からの活躍への期待につながります。